

12 ライフワーク活動をしている統合失調症者の人生の足跡

－人への怯えから、人との心の分かち合いへと変化を遂げたL氏の場合－

○山元 恵子（関西福祉大学看護学部）

I. はじめに：1990年代に入り海外では、精神障がい者の回復過程に伴う意識や感覚の変化に焦点を当てた論文が多く提出されている。そこでは、従来の回復の捉え方とは異なり、病気や健康の状態の如何にかかわらず、希望を抱き、自分の能力を発揮して自らが選択できている状態ならば、回復（リカバリー recovery）として捉えている（野中2005）。

II. 研究目的：ライフワーク活動をしている統合失調症者（以下、当事者という）その人のどのような力が回復のために働き、どのような状況が必要なのか解釈を行うことである。

III. 研究方法

対象者 地域で安定した生活を続けている当事者で、ライフワーク活動を通して社会的活動を行い、自己の人生を語ることに積極的な同意を得られる人を条件とした。

研究デザイン 当事者の視点で現象を捉えるため、当事者の語る言葉を詳細に捉え内包されている感覚・意識・指向性などを含めて拾いだし類似性を構築するアブダクション（abduction）技法としてのK J法を用いた。

研究方法 対象者1名に半構造化インタビューを実施し、内容は承諾を得てテープレコーダーに録音し逐語録に転記し、狭義のK J法1ラウンドを行った。表札作りは、川喜田の核融合法を用いている。データ収集期間は2006年10月である。

倫理的配慮 施設管理者に研究計画書を提示しインタビューの許可を得た。対象者には、書面で研究の趣旨・方法を説明した後に署名を頂いた。常に本人の意思が尊重され、研究協力を拒否しても日々の生活の妨げにならないことを説明し、インタビュー中も、当事者自らが話す内容に傾聴する姿勢を保った。

用語の定義 ライフワーク活動とは「障がいを持つ人その人が主体になり、強制されず、自らの意志で続けている社会的な行いのこと」とする。

IV. 結果：138枚の元ラベルからK J法A型図解を作成した。L氏の回復過程として（1）発病後、疎遠になった実家との付き合いの再開（2）閉鎖病棟長期入院の弊害（3）福祉施設の効用（4）物理的、人的環境の変化（5）居場所と生きがいの発見（人々との心の分かち合い）の5要素を見出した。

V. 考察：L氏は20代で発病し10年の長期入院中に、薬の副作用と劣悪な環境、及び虐待を体験した。退院後、人への怯えが残ったが、福祉施設でのメンバー及び職員との交流を通して10年かけて心の平安を取り戻した。自らも仲間作りの輪を広げるという目標を持ち実践することにより回復は促進された。慢性的な状況を作りだすのも看護師なら、改善できるのも看護師である。看護師は回復の阻害因子として関わるのではなく、当事者がその人らしい生き方ができるよう第2の回復であるリカバリーを意識して関わる必要がある。

VI. 結論：（1）当事者自身が希望を見出し自ら行動をする中で、自己が統合されていき、最終的に居場所と生きがいの発見に繋がっていた。（2）長期入院による弊害から受ける心の傷への援助が必要である。（3）回復を促進する環境因子と阻害する環境因子がある。